

『響きと怒り』におけるクエンティンの 時間との戦い

石川 和代

Quentin's Struggle with Time in *The Sound and the Fury*

Kazuyo ISHIKAWA

I

William Faulkner の4番目の長編『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929)は、『サートリス』(1929)より6ヶ月後に発表された作品である。『サートリス』では、物語は年代順に展開され、従来の小説の型式に従っているが、『響きと怒り』は全体が4部に分けられ、第1部は1928年4月7日、第2部は1910年6月2日、第3部は1928年4月6日、第4部は1928年4月8日の日付がつけられている。そして第1部はコンプソン(Compson)家の末っ子、白痴のベンジャミン(Benjamin)の意識の流れ、第2部は長男クエンティン(Quentin)の自殺にいたるまでの1日の意識の流れ、第3部は次男のジェーソン(Jason)の意識の流れ、第4部は作者によるコンプソン家全体の客観描写になっている。この作品には、第1部から第3部にかけて使われている「意識の流れ」の手法をはじめとして、様々な表現上の技巧が用いられているため、前作『サートリス』から飛躍的發展をとげた作品であると批評されている。第1部は白痴ベンジャミンの意識をそのまま描いているため、過去と現在が混然一体になっていて、出来事の起きた順序が、読者にはきわめてわかりにくい。第2部、第3部、第4部の中で、読者の心に最も強い印象を与えるのは、第2部におけるクエンティンの精神的な苦しみであろう。前にも述べたように、第2部はクエンティンが自殺するまでの1日の意識の流れを描いたものであり、時間と戦う彼の苦しみが、読者の心にはっきりと伝わってくる。そこで、クエンティンの時間との戦いを中心に、この作品を考察してみたいと思う。

II

第2部には、ハーヴァード大学に学ぶクエンティンの自殺の日の、朝目を覚ましてから夕方自殺するまでの意識の流れが描かれている。作者は自殺寸前のクエンティンの精神の混乱をそのまま伝えているため、彼の意識は、現在から過去にかえり、また現在にもどってくるという、きわめて複雑なものである。“When the shadow of the sash appeared on the curtains it was between seven and eight oclock and then I was in time again, hearing the watch.”¹⁾ではじまるクエンティンの1日は、まさに時間との戦いである。彼が目を覚ますとき、それを聞きながら時間の中にはいりこんだというその懐中時計は、かつては祖父のものであり、それを父親がクエンティンにくれたのであるが、それを渡すとき父親が彼に言った言葉は次のようなもの

である。

Quentin, I give you the mausoleum of all hope and desire ; …… I give it to you not that you may remember time, but that you might forget it now and then for a moment and not spend all your breath trying to conquer it. Because no battle is ever won he said. They are not even fought. The field only reveals to man his own folly and despair, and victory is an illusion of philosophers and fools.²⁾

クエンティンの父親は、時間との戦いなどされたこともないし、勝たれたためしもないと言う。勝てないとわかっているながら時間との戦いをしなければならないクエンティンは、悲劇的であると言える。父親が時計をくれるとき、時間をしばらく忘れるために時計をやると言ったにもかかわらず、クエンティンは時計によって時間を意識してしまう。

I dont suppose anybody ever deliberately listens to a watch or a clock. You dont have to. You can be oblivious to the sound for a long while, then in a second of ticking it can create in the mind unbroken the long diminishing parade of time you didn't hear.³⁾

彼は懐中時計をうつ伏せにしてベッドにもどるが、時計が見えなくなると、何時だろうと思いはじめる。そしてまた父親の言ったことを思い出す：“Father said that constant speculation regarding the position of mechanical hands on an arbitrary dial which is a symptom of mind-function. Excrement Father said like sweating. And I saying All right. Wonder. Go on and wonder.”⁴⁾人間が時計に表われた時間を気にするのは、精神作用のしるしだと言うのである。これを聞いたクエンティンは、おそらく、自分が生きている限り、時間を意識することからのがれられないことを知ったであろうと思われる。

この日、クエンティンは、友人のシュリーヴ (Shreve) が誘いに来て大学に授業には行かず、妹キャディ (Caddy) がドールトン・エイムズ (Dalton Ames) のために処女性を失ったときのことをしきりに思い出し、いたたまれない思いから、自殺しようと思っている。時計をうつ伏せにしても時間を忘れられなかった彼は、またもや時間に対する無駄な抵抗を試みる。

I went to the dresser and took up the watch, with the face still down. I tapped the crystal on the corner of the dresser and caught the fragments of glass in my hand and put them into the ashtray and twisted the hands off and put them in the tray. The watch ticked on. I turned the face up, the blank dial with little wheels clicking and clicking behind it, not knowing any better. ……

There was a red smear on the dial. When I saw it my thumb began to smart.⁵⁾

クエンティンは、時間を忘れようとして、懐中時計のガラスをこわし、針をねじりとる。しかし、それによって時間を忘れることはできないし、かえって自分自身を傷つけてしまうのは皮肉なことである。いくら時計の針をねじりとってみても、チャイムの音やどこかの時計の時を知らせる音が聞こえて来て、彼に時間を意識させる。そこで彼は、“it takes at least one hour to lose time in, who has been longer than history getting into the mechanical progression of it.”⁶⁾と考える。そして時計台を見ると、彼は時間を忘れようとする自分の意志に反して、再び時間を意識してしまう。

There was a clock, high up in the sun, and I thought about how, when you dont want to do a thing, your body will try to trick you into doing it, sort of

unawares. I could feel the muscles in the back of my neck, and then I could hear my watch ticking away in my pocket and after a while I had all the other sounds shut away, leaving only the watch in my pocket.⁷⁾

クエンティンがこわれた時計を見せるという口実で、貴金属商のショー・ウィンドーへ行くと、そこは“full of ticking, like crickets in September grass”⁸⁾である。彼は否定的な答えを期待しながら、“Would you mind telling me if any of those watches in the window are right?”⁹⁾とたずね、“No. But they haven’t been regulated and set yet.”¹⁰⁾との答えに満足する。彼は、Perrin Lowreyが言っているように、“that watches lie, that they measure only apparent time, the opposite of real time.”¹¹⁾ということ信じたいと思っているのである。その見せかけの時間からのがれるために、彼は“shutting the door upon the ticking”¹²⁾しながら店を出て行くのだが、そのとき並んでいる時計を見ながら、時計が真実の時間を表わしていないことを確信する。

There were about a dozen watches in the window, a dozen different hours and each with the same assertive and contradictory assurance that mine had, without any hands at all. Contradicting one another. I could hear mine, ticking away inside my pocket, even though nobody could see it, even though it could tell nothing if anyone could.¹³⁾

そしてすぐに、彼は父親の言ったことを思い出す：“Because Father said clocks slay time. He said time is dead as long as it is being clicked off by little wheels; only when the clock stops does time come to life.”¹⁴⁾クエンティンの父親は、柱時計は時間を殺害するもので、柱時計が止まるとはじめて時間はよみがえって来ると言ったのである。そのことを思いながら並んでいる時計の針をながめると、“The hands were extended, slightly off the horizontal at a faint angle, like a gull tilting into the wind. Holding all I used to be sorry about like the new moon holding water, niggers say.”¹⁵⁾であり、まるで時計の針の示す時間は、クエンティンが避けたいと思っていることを押しとどめているようである。

あとでクエンティンがスクーターを見ると、近くにかもめがいて、彼に時間と空間を超越したものを感じさせる；“……I saw a glint of water and two masts, and a gull motionless in midair, like on an invisible wire between the masts, ……”¹⁶⁾という描写に続いて少しあとに、“……with three gulls hovering above the stern like toys on invisible wires.”¹⁷⁾という描写もある。少したってから、彼は父親の言ったことを思い出す。

Father said a man is the sum of his misfortunes. One day you’d think misfortune would get tired, but then time is your misfortune Father said. A gull on an invisible wire attached through space dragged. You carry the symbol of your frustration into eternity.¹⁸⁾

人間はその不幸の総計であり、時間が人間の不幸であるが故に、両者の戦いにおいて、不幸の方がくたびれてしまうことはないと言ったのである。時間と戦い、時間に抵抗しながら、父親の言ったことを思い出し、時間に勝つことはできないのだと思わざるをえないクエンティンである。昼頃になり、彼は次のように言う。

I could hear my watch whenever the car stopped, but not often they were already eating……Eating the business of eating inside of you space too space and time confused Stomach saying noon brain saying eat oclock All right I

wonder what time it is what of it.¹⁹⁾

もし彼がかもめのように時間と空間を超越した存在になることができるならば、彼は苦しまないですむのだが、刻々と過ぎ去る時間を彼の身体そのものが意識しているが故に、そうはいかないのである。

ところで、なぜクエンティンは勝つことができないと知りながらも、このように時間との戦いをしなければならぬのか、一体何が彼にそうさせるのであろうか。前に少しふれたように、彼は妹キャディがドールトン・エイムズのために処女性を失ったことに対して、言葉では言い表わせぬほど大きな精神的苦しみを感している。彼のキャディに対する気持は、兄の妹に対する気持以上のものと思われる。コンプソン家の現状に目を向けてみると、父親はすでに人生に希望を失ってしまった男で、酒におぼれ、人生を皮肉な目でながめているし、母親は崩壊した家庭状況の中で、自分1人を支えるだけの精神力もなく、非常に自己閉鎖的になり、子供たちに温かい感情をもつことすらしない。そのことは、クエンティンの心の中に描かれたイメージを表わす、“I was glad. I'd have to turn back to it until the dungeon was Mother herself she and Father upward into weak light holding hands and us lost somewhere below even them without even a ray of light.”²⁰⁾という言葉にも象徴されている。クエンティンの“…… if I'd just had a mother so I could say Mother Mother”²¹⁾という心の叫びからわかるように、彼は母親に温かい愛情を求めても得られず、妹キャディに対して、母親のような温かい愛情を求めようになる。最初、彼のキャディに対する感情は息子の母親に対する感情なのであるが、次第に変化し、彼はそれほど年のちがわない妹キャディに対して、恋人に対する感情にも似た気持を抱くようになる。そうであるが故に、キャディの処女性喪失に対するクエンティンの心の痛手は、想像することのできぬほど大きなものなのである。このあたりの事情は、“Underlying Quentin's disturbed antagonism to Caddy's marriage is a complex brother-sister relationship that had its roots in their childhood and in the negativity of their mother.”²²⁾という、Melvin Backmanの指摘にもある通りである。

クエンティンは、キャディがドールトン・エイムズのために処女性を失ったという事実をどうしても認めることができず、その事実を抹消しようと思う。彼は自分がキャディの処女性を奪った、すなわち、自分とキャディが近親相姦の罪を犯したという妄想を抱く。その理由は、彼がのちに身を沈めることになる川をながめているときの、彼の意識の描写に表われている。

*If it could just be a hell beyond that : the clean flame the two of us more than dead. Then you will have only me then only me then the two of us amid the pointing and the horror beyond the clean flame……Only you and me then amid the pointing and the horror walled by the clean flame*²³⁾

クエンティンは、地獄の片隅でキャディと2人だけになり、あらゆるものから隔離されて、清らかな炎に囲まれていたいと願う。彼は近親相姦という罪によって2人が結び合わされると考えるのである。しかし、彼の近親相姦の妄想は、自分とキャディが結ばれたいという欲望だけではなく、コンプソン家の名誉を守りたいという彼の願いとも関係がある。Faulkner自身、付録のところで、クエンティンについて次のように言っている。

Who loved not his sister's body but some concept of Compson honor precariously and (he knew well) only temporarily supported by the minute fragile membrane of her maidenhead as a miniature replica of all the whole vast globy earth may be poised on the nose of a trained seal.²⁴⁾

アメリカ南部の社会の中で、キャディの処女性喪失は、この上なくコンプソン家の名誉を汚すものであり、その名誉を守るためにも、クエンティンは、何としてもドールトン・エイムズによるキャディの処女性喪失の事実を抹消しなくてはならない。こういった2つの理由から、クエンティンは近親相姦の妄想を抱き、その罪が永遠なものであることを願うのである。

ところで、クエンティンの父親の言葉が表わしているように、時間は愛や悲しみすらも忘れさせてしまうものである。

……it is hard believing to think that a love or a sorrow is a bond purchased without design and which matures willynilly and is recalled without warning to be replaced by whatever issue the gods happen to be floating at the time no you will not do that until you come to believe that even she was not quite worth despair……²⁵⁾

そうであるならば、近親相姦の罪を永遠のものにするためには、どうしても彼は時間と戦い、時間に勝ち、時間を抹殺しなくてはならない。Peter Swiggartが言っているように、“Quentin wants to live forever in the moment when consciousness still exists but when time, which alone can bring death, has been forever stopped.”²⁶⁾であり、Perrin Lowreyの言う通り、“What Quentin really wants is to get outside of time, to get into eternity.”²⁷⁾であると言える。しかし、人間は生きている限り、時間からのがれることができないが故に、クエンティンは死ぬことこそ永遠に時間からのがれることと考え、死ぬことによって時間を超越した永遠なる世界に身をおこうと決意する。彼は地獄の片隅で永遠にキャディと2人だけになり、あらゆるものから隔離されて、清らかな炎に囲まれて、彼女を守り続けるために、悲劇的な時間との戦いを続け、ついに死を選ぶのである。それにしても、このように時間からのがれようとして死を選ぶクエンティンでありながら、自殺する少し前に、妹キャディを思わせるイタリア系移民の少女と町を歩きながら、“If I had time. When I have time.”²⁸⁾と思うのは、仕方のないことであり、それが人間というものなのであろうか。

III

以上のように考えてみると、クエンティンを自殺させることになった彼の精神的苦悩の主な原因は、妹キャディがドールトン・エイムズのために処女性を失ったことであることがわかる。しかし、クエンティンがそのことによって、あんなにも苦しまなければならなかったのは、母親が子供たちに温かい感情を持つことができず、そのために彼が妹キャディに対して兄妹間の愛情以上のものを感じてしまったからであり、また、アメリカ南部の社会の中で、まだ結婚していない娘の処女性喪失が、一家の名誉を汚すものとして、余りにも大きな部分を占めていたからである。たとえそうであったとしても、あの父親のひどく悲観的な時間に対する考え方の影響を受けなかったならば、クエンティンは、戦いに勝てないと知りながら、時間との戦いを続けるという、悲劇の主人公にならないですんだのではないだろうか。もしクエンティンが時間との戦いをしなければ、彼は自殺まですることはなかったのではないかと思われる。それではなぜ父親が悲観的な時間に対する考え方を持ったかといえ、やはりそれは父親自身が、アメリカ南部という、過去が現在の上に重くのしかかって来る運命を背負った社会に生まれ育ったが故であろう。そのように考えるならば、クエンティンは、人生に希望を失った父親と子供に愛情を持たない母親からなる崩壊した家庭に生まれ育ったが故に、あの時間との戦いに苦しみ、自殺せざるをえなくなったのであり、その悲劇の背景には、アメリカ南部の社会のか

かえる問題が存在していると言うことができるだろう。

注

- 1) Faulkner, William: *The Sound and the Fury*, 93, The Modern Library (1929)
- 2) *Ibid.*, 93
- 3) *Ibid.*, 93~94
- 4) *Ibid.*, 94
- 5) *Ibid.*, 98~99
- 6) *Ibid.*, 102
- 7) *Ibid.*, 102
- 8) *Ibid.*, 102~103
- 9) *Ibid.*, 103
- 10) *Ibid.*, 104
- 11) Lowrey, Perrin: "Concept of Time in *The Sound and the Fury*," in *Twentieth Century Interpretation of The Sound and the Fury*, ed. Michael H. Cowan, 57, Prentice-Hall (1968)
- 12) Faulkner, 104
- 13) *Ibid.*, 104
- 14) *Ibid.*, 104~105
- 15) *Ibid.*, 105
- 16) *Ibid.*, 110
- 17) *Ibid.*, 110
- 18) *Ibid.*, 129
- 19) *Ibid.*, 129
- 20) *Ibid.*, 215
- 21) *Ibid.*, 213
- 22) Backman, Melvin: *Faulkner: The Major Years: A Critical Study*, 18, Indiana University Press (1966)
- 23) Faulkner, 144
- 24) *Ibid.*, 411
- 25) *Ibid.*, 221
- 26) Swiggart, Peter: *The Art of Faulkner's Novels*, 95, University of Texas Press (1962)
- 27) Lowrey, 56
- 28) Faulkner, 170